

現 状

【乳用牛の能力等】

(泌乳能力)

- 泌乳量については、遺伝的能力、表型値(実測値)ともに順調に伸びている。
- 乳成分については、前回目標で現状維持とされており、横ばいで推移。

(繁殖性、耐久性)

- 初回授精受胎率は低下傾向で推移。
- 分娩間隔は横ばいで推移しているが、一層の短縮が必要。

(新たな搾乳機器への対応)

- 搾乳ロボットの普及が進む中、1~2割程度の牛は、体型、気質、搾乳性(搾乳の速度)等の点でロボットに適合しないとの声がある。

【種雄牛の選抜・利用】

(後代検定・牛群検定)

- 検定加入率は、ほぼ横ばい傾向(飼養頭数の約6割)で推移

(ゲノミック評価)

- SNP遺伝子解析技術を活用したゲノミック評価を開始

(国産種雄牛の活用)

- 輸入精液の利用割合は約5割に増加

課 題

【乳用牛の能力等】

(泌乳能力)

- 引き続き現在の方向性での改良が必要。
- ただし、乳量の改良に当たっては、ピーク時以外の乳量が増加するような、泌乳持続性の高い改良が必要。

(繁殖性、耐久性)

- ゲノミック評価を活用し、遺伝率の低い繁殖性、耐久性に関する形質についても効果的に改良を進める必要
- 飼養管理の改善を、酪農家の過酷な労働環境に配慮しながら、実現可能な形で推進していく必要。

(新たな搾乳機器への対応)

- 現存する種雄牛が、ロボット搾乳にどの程度適性があるか、まずは調査することが必要。

【種雄牛の選抜・利用】

(後代検定・牛群検定)

- ICT技術を活用した、より利便性の高い検定データ活用ソフトの農家への提供が必要
- 検定参加農家の負担軽減が必要(ゲノミック評価の活用による候補種雄牛、調整交配娘牛の頭数減少、性判別技術の活用)

(ゲノミック評価)

- ゲノミック評価の精度向上が必要

(国産種雄牛の活用)

- 酪農家の多様な改良ニーズに合致した種雄牛の提供が必要
- 国産ヤングサイアーの扱いの検討
- 系統外交配が可能で(アウトクロス)能力の高い種雄牛作出も引き続き進める必要。